

12/18 マタイの福音書 1 章 18-25 節 「その名はインマヌエルと呼ばれる」

小池 宏明 牧師

御使いガブリエルがエルサレム神殿で仕えている祭司ザカリヤに現れてから半年後、北部ガリラヤ地方の小さな村ナザレに住むマリアに現れた。受胎告知のためだ。このマリアと婚約していたのが、同じナザレ村の大工のヨセフである。当時のユダヤにおける婚約は、結婚したことと同じ重みがあった。

*ヨセフと父なる神の葛藤

19 節「夫のヨセフは正しい人で、マリアをさらし者にしたくなかったので、ひそかに離縁しようと思った。」ここで言う「正しい人」とはユダヤ人の律法にかなった人物のことだ。旧約律法によれば、婚約中マリアの妊娠は、ヨセフへの裏切りになるので、ヨセフはマリアを公の法廷に突き出すことができる。それこそ律法に適う「正しさ」である。しかし、ヨセフは、マリアをさらし者にしたくなかった。ヨセフの「正しさ」は愛と憐れみという側面もある。愛するマリアと生まれて来る赤ちゃんを憐れんで、守るために、自ら離縁しようと思ったのだ。このような葛藤は父なる神様のお姿でもある。聖書が啓示している私たちの父なる神様は、罪深い人類をさばくことができる正義の神だ。一方で、人々が悔い改めて立ち返ることができるように、何度もチャンスを与え、さばきを遅らせておられる憐れみ深い神様でもある。主イエス・キリストの誕生は、まさに、「正義によるさばき」と「憐れみによる救い」の両方を全うできる父なる神様の深い御心の現われなのだ。悩み苦しみながら思い巡らしているヨセフに、主の使いが頭われて「ダビデの子ヨセフよ、恐れずにマリアをあなたの妻として迎えなさい。その胎に宿っている子は聖霊によるのです。マリアは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方がご自分の民をその罪からお救いになるのです。」と命じた。ヨセフは、妻マリアと一緒に生活を始めて、救い主のイエス様を育てる決意を固めた。

*インマヌエルの主があなたと共に

マタイはイザヤの預言のことばが実現したことを伝えている。「見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」それは、訳すと「神が私たちとともにおられる」という意味である。」イエス・キリストは、いつも共にいて下さる憐れみ深い救い主だ。私たちは、地上においてイエス様を肉眼で見ることはできないが、主は今も確かに生きておられ、共に（すぐ近くに、隣りに）いて下さる。このイエス・キリストを心から受け入れることが、あなたとあなたの周りにいる一人ひとりの救いと再出発につながる。